

太 棹

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十六年二月廿三日 印刷納本
昭和十八年二月廿五日 發行

(每月一回)
(廿五日發行)

太 棹 (第百四十二號)



第百四十二號

形人樂文の集蒐氏郎太金藤齋



齋藤金太郎氏は昨夏大日本淨曲協會の新理事長に就任するや直ちに協會の改組を斷行し、爾後新事業の企劃に盡瘁、我が國特有の古典藝術淨瑠璃の精神こそ日本魂である、米英膺懲に邁進するの時、層一層日本魂の昂揚に努めねばならぬと力説し、此淨瑠璃精神を一般大衆をして教化するには人形をつけねば無効であるとして甚大の私財を投じて人形部並びに義舞部をも説立し、撃てし止まむの精神強調、松坂屋を始め各地に出張しての實演は頗る好評である。

寫眞は氏の蒐集に依る文樂人形。彦六座、近松座、堀江座に使用せしもの。天狗久、天狗良辨、由龜、人形富、面子等の作に成り、いづれも刻印附きにて百五十餘種の頭がその衣装と共に協會三階の倉庫に藏されてゐる。

風流・金ぶら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

席貸

並木俱樂部

浅草・雷門
電話浅草一二三五番

御禮

東京臨時第一陸軍病院 太棹百四二號
五十冊

東京臨時第三陸軍病院 同三十冊

寄贈者 齋藤金太郎氏

右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈を賜り候段難有奉深謝候

太棹社

撃ち止まむ

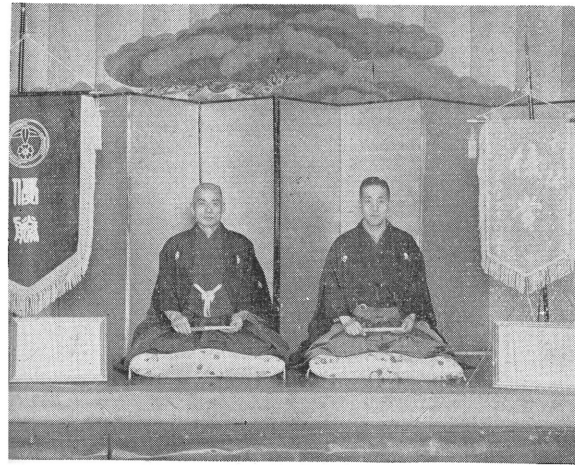
野田高尾

會賀祝勝優氏波呂以田行



豐澤扇之助連の行田以呂波氏は昨年京都市に於ける平安素義淨曲會に出演し、一等に入賞優勝旗獲得の榮譽をになひ、亦東京よりの出演者多數を以て豊澤扇之助師は代表として團体旗を獲得したその祝賀會が一月廿八日正午より並木俱樂部に於て華々しく開催された。(前號記事参照)

以呂波氏は埼玉縣川口市の人、濃厚篤實家庭圓滿にして鑄物工業を經營。永年町會長の職にあつて傍ら弓術を練磨して五段に及ぶ。義太夫は中途一時中止せしも最近は扇之助師に就て不斷の努力を以て大に精進、平安會に上演「忠六」は最も定評あるものである。



師助之扇澤豐右氏波呂以田行左て向



太棹 第四百二十二號 目次

表紙・カツト……………齋藤清二郎

口繪 齋藤金太郎氏蒐集の文樂人形・行田以呂波氏祝賀會

演舞場の文樂出開帳(三)……………齋藤拳三(三)

文樂通信……………西尾福三郎(七)

春宵二題……………内田三千三(二〇)

發表會の今日に至る迄……………豊澤芳太郎(二)

太棹社彙報……………(三)

會報・消息……………(一六)

督聲會の盛況(後藤光仙) 三好會(森三好)

社告……………(二〇)

編輯後記……………富取生

演舞場の文樂出開帳 (二)

齋藤拳三

大東亜の戦線は益々擴大し、戦局の前途は尙遠慮である。國運を賭しての國家總力戦である。年二回、酷暑と歳末の最悪季節に上京する大阪の人形淨瑠璃文樂座は、全部が、各々多忙な寸暇を裂いて鑑賞して置かないと、好き者は後世に悔を殘す程度の名品のみであらうか、此の頃めつきり増へた金ボタンの學生の爲にも、吾等は先輩として、其の玉石を別けておく必要があると思ふ。柄にない禿筆、饒舌を振ふ所以である。

第四回 (十二月廿日)

文樂愛好家、或は院本愛好家と云つた方が正當かも知れない、其れに答へての待望久しかつた菅原の通しが出た、筆者に云はすれば津、土佐、古靱、三頭目一日變りの二、三、四段目も聽かれぬ今日、然も駒、鑿、源、其れぞれ端場の修業をつんだ人達の死後では甚だ後の祭りの感はある。然し四時開演を三時に繰上ての上演である、この非常時に有難しと頂いて置く。

然し若手カケ合大賣出しの犠牲として二段目の櫻丸飴賣を傳授場の前にしたり、車引を中途へはさんで出したりする犠牲は少々賛成致し兼ねる。當日賣半額の木戸口に行列して居る

學生さんに、不具者となつた菅原傳授手習鑑は見せたくないからである。

住太夫の筆法傳授は流石に本格的な端場を修業をして來た人だけあつて近頃での此人の傑作だつた。特に菅相丞と希世の語り方は斷然今の若手の粉本とするに價する結構なものであつた。

人形も源藏が希世を足でふまへて清書をする人形独自の演出、希世に机を背負はせる幕切れ、御臺の打掛の下から師の温顔に名残を惜しむ戸浪の哀れな別離など、相等胸に迫るものがあつた。

人形も、美事な品位と貫目を見せる榮三の菅相丞を初めてし、一番危険な紋司の希世も奇抜な赤衣着附の人形を無事に

遣ひこなし、老巧小兵吉も平常の投げてる舞臺に似ず戸浪を旨く遣つて「お顔も拜まぬ女房の悲しさ」の邊は住太夫の妙音と相待つて心行くばかり人形劇獨特の不思議な哀感を漂はした。

次の築地は、相生大夫が不勉強らしく何となくピンと來ない、其の癖吉五郎の糸は例の如く端場ゆゑすばらしかつた。人形も梅王が土塀の上から若君を逃がしたり、瓦を投げたりして愉快な一幕だつた。

二段目になつて伊達太夫の杖折鑑は丞相がまだ語れてゐなかつた。

織太夫團六の東天紅は無難な出來であつた。何にしても此の度一番氣の毒なのは織太夫で、觀西翁のお附合か古靱太夫の前か後へばかり出されて甚だ無能な幕内の犠牲となつた形である。

古靱太夫の道明寺は最も期待した語り物であつたが、餘り期待が大き過ぎた爲めか、私は其れ程に感じられなかつたのはやはり語り物が非常に至難皮肉なものだからであらう、意外にも奴宅内などの件がいくと思つた。

少々私事に渡るが、此の日、古靱太夫は非常に悪い條件のもとに置かれた日だつたさうである。非常に節の無器用だつた故土佐太夫は不思議にも大文字屋の如き人物のゴチャ／＼出入するものが得意で、反對に節の非常に器用な古靱太夫は

良辨杉の如き人物の出入の少い少人數の對話的なものが旨いと思ふ。

或は書齋で一人院本や古本を讀むのが好きな古靱太夫には難かな對話的なものゝ方が同感があるのではなからうか。

筆者は菅原は二段目が特に好きで有る。と云ふのは一時的にしる「人盛なれば天に勝つ」即ち車場の時平には梅王櫻丸の兄弟など一睨みで、てんで曲が立たない、然し菅相丞の如き神に近い偉人には土師兵衛、宿禰太郎の如き小人がいかに小策を弄しても後から後から願々に太陽の前の霜の如くに、跡方もこはれて行くのである、故意か偶然か二段目はこれが對照的に鮮かに書かれてゐると思ふ。

其れには道明寺の菅相丞は、以上の如き超人的な善惡邪正を照す氣品で場内を感嘆して望しいと思ふ、勉強家の古靱太夫だ、他日の大成、研究を待つ次第である。

榮三の菅相丞は相變らず傑作だつた、「身は荒磯」の件や「河内の土師村道明寺」の件など全く敬服である。

甚だ亦餘談に渡るが、歌舞伎の菅相丞は世評とは全く反對で、歌右衛門、吉右衛門が甚だ平凡でかへつて故仁左衛門、雁次郎が人形劇の影響の爲か非常な傑作であつた事を附記して置く。其他では期待した小兵吉の宅内が甚だ平凡で、かへつて玉造の宿禰太郎が佳作で有つたのは、筆者などの豫想は全くあてにならぬ事を痛感した次第である。

此の次に車引が出てゐるのは全く亂暴な順序である、然も粗雑な演出で、特に玉徳の時平の足は誰だか知らぬが亂暴である。

七五三太夫の喧嘩の段は只大聲でどなるばかりで「虫酢が走るわ」の後の笑に呼吸の切り方が悪いので、松王が笑つてゐるのか梅王が笑つてゐるのか不明である、此れは指導の三弦綱造の責任としたい。

其れに比すれば南部大夫の訴證はぐつと結構である。

櫻丸切腹は呂、相生一日變りの悪習で何にしても茶詮酒抜き三段目など、真面目に論じるよりも仙糸の三味線でも聽いておればいゝのであらう。

榮三の白太夫は結構で「一物有り」はふところ手で下を向いてるだけだが相當味が有り、梅王には座布団を投げ付け松王には箒を投げる型で有る、段切れは故玉次郎の所演と異りぐつと演出に動いて面白かつた。眼鏡をかけた白太夫の人形は一興である。門造の梅王は車場は投げてるらしく、此の場へ來てからは別人の如く立派で、櫻丸の死體の側に極る横向きの型は美事だつた。

龜松の八重は「待つ夫」で門口の柱に上手向きに極るのは悪い型を眞似たもので有る。

大隅大夫の寺子屋は、靜太夫時代白井社長に認められた出世藝で、其の名品は一段が半分程道八の糸でレコードに録音

第五回 (十二月廿五日)

妹脊山婦女庭訓の吉野川は大隅の大判事が「此の國境は生死境」と「首ばかりの嫁御寮」の二個所が落第である、「霧隠れ」をほうり出す語り方も誤謬である。僅に「女が頬一目見て何故死なぬ」が昔日の吾が靜太夫らしい。雛鳥、久我之助は南部と伊達の一日變り、誰のを聽いても同じですから、どの日に御來場下されても決して御損は御座いませんと云ふ松竹の營業方針らしい。

人形は玉造の大判事が結構で、「親子の誠」と久我之助と上下に手を取る件、兩手に首を持つ段切れ等、氣迫のこもつた好演技であつた。玉造は勘違さへしければ結構遣へる人なのである。

人形獨特の技巧は「千秋萬歳千箱の玉」で大判事が清船に末期の水を吞ませる事、「涙の川瀬」で首を切る事、流れて來た雛の道具を小づかに下げ尾を附けて是を投げて引寄せせる等、獨特の技巧である。

古靱太夫の野崎村は久々の出し物で、此の度は久作と婆に實にすばらしい研究があり渾然たる一段であつた。

特に敬服なのは病人の婆で「親父どの久松も其處にか」の最初の言葉が、全く長病ひの失明した老婆なのは偉いものである。「たんか胸に」で、一寸せくのは古靱太夫の新案で

されてゐる。

前日、日本橋俱樂部へ重太夫の日吉丸三段目を覗きに行つた筆者は、餘りにも大隅の寺子屋が不評なので、そつと此の一段だけ聽きに行つたのである。

成程悪くなつてゐる、昔ながらの善き個所は「御座んしよがな」から「よいとも」となる意氣、「こいつ」と大きく云ふ件、「突きはなつ」と糸に離れる件、「走り行く」の古風な點、「胸とどろかす」の荒けずりな節等、部分的には昔ながらの大隅だが、足取りの悪さと腹の薄い點では今の文樂中第一人者である。

住太夫にしろ此の人にしろ、年少の三味線を合三味線として少しも勉強しないらしいのは、文樂愛好者にとつては、此んな寂しい事はない。古靱太夫なき次の時代となつて最も重責のある人達が、自己の置位と責任を考へたら、遊び半分の素義の審査員など安閑としてゐられないはずである。

そんな暇には、大隅太夫は一日ゆつくり昔の自分の録音したレコードでも聽いて見る方がいゝ。

人形は小兵吉の戸浪の「けしとむ内」の件と、文五郎の千代の「悪さを御頼み申しまして」の奥を一寸見込む件が結構である。

門火の件になつて、玉助の源藏と小兵吉の戸浪は人形が低過て下へめり込んでゐた。

流石に旨いものである。久作も「むくつけの親父」など此度の進歩である。

清六も、徳太郎から清六に改名した當時から見ると實に長足の進歩で、此の人のなみ／＼ならぬ精心がうかがはれて、畏敬するにたりる。

文五郎のお光は「何にも云つて下さんすな」の如きシツトリ遣う件になると、流石國寶ものであるが、前半のお光は例のやり過で少しも可愛らしくない。特に門口を開け放して置いて、お染に久松を見せぬ様に、兩袖でかくす型は愚劣である。

龜松のお染は「誓紙に嘘が」の所はよく遣つてゐた。

榮三の久作は平凡で、此の人にはお光かお染を遣はせたいものである。

紋太郎の船頭は場當りだが、場所が場所だけにお景物であつた。

榮三郎の久松は當人は上手のつもりらしいが、まだ政龜程度にも遣へてゐない。

次の合邦は前半織太夫で、今日は三味線が團六故か上出來で、節は石版刷りの古靱だが、言葉は古靱ばなれの獨創が隨所に見へて、豊富な聲量だけに樂々としてゐて樂しめた。筆者は古靱に歸れと云ふ武智金二氏説には大反對で、何より早く織太夫は古靱太夫から離れてもらひたいと思ふ。

後半の呂太夫は五日の内此の合邦の奥が一番の出来であつた、「おいやい」など最初を大きく真正面からぶつつけるなど美事である。入平の閉口する件を「へい御免へい御免へい御免、へいへい御免」と互ひ違ひに行くのも面白く「さては其うか」以下の間取りも美事だつた。仙糸は引かき廻す箇所になると弱腕が眼立つが「御手を引いて忍び出で」の如き何でもない箇所が癩病でも病んでる人の如き足取りに聴へて全く獨特の至藝である。

「玉手は氣丈の身がまへ」以下は三代團平、或は富助あたりが彈いた至難な手を彈いてゐた。

仙糸はハリ切りがはずれたり、よくひつかつたりするから素人には平凡に聴へるが、非常に長短のある一種の名人藝である。

人形は政龜の婆が相變らず非常な傑作で獨特の演り方である。「何とぞ聞いてか」で鐘をたしきながら「ふり返る」件「百萬邊」で手負の玉手御前と抱き合ふ件、「娘を往生させ給へ」で門造の合邦と二人で、玉手の死體を勞はる件など好演技である。門造の合邦も町寧に多爲藏型を到襲して、玉造などよりぐつと面白い。玉手は榮三が遣はない以上一見の價値なく此の日も榮三郎の姫と紋十郎の玉手は「嫉妬の亂行」が何時もの通り軍鶏の戯合である。

一體文樂の人形遣は總じてせつかちで、淨瑠璃の文句の終



文樂通信

西尾福三郎

順序として文樂の正月興行の記事から筆を起すべきであるが、本誌の發行期日の關係や、筆者の都合等で今更ら數ヶ月前の印象批評を物してみたところ始まらないから割愛して、恒例によつて本年初めての文樂通信を二月興行の記から取かゝる事にする。

待望の二部興行が新春から開始されたが、第一回は晝の部に忠臣藏を据えて、これに夜の本興行に洩れた人々を網羅したが、如何せん四時間半の中途半端な時間に忠臣藏の通しはとも無理な相談で、首尾切斷、その上肉を斬り骨を削ぎと云つた傷だらけの忠臣藏となつて評判はよくなかつた。これが爲に久々上演の忠臣藏に味喰がついて又暫らくこの演し物がお蔵になるのではないかと思はれる。

二月の晝の部は嫩軍記の内珍らしい初段の敦盛出陣から陣門、須磨の浦、組打、脇ヶ濱、陣屋、と並べて筋を通してゐる。即ち組打の段に到る迄の筋道は新附の敦盛出陣の追加に

らない内に引込むのが常習であるのに、此の玉手御前に限つて長く納戸へ入らないのは甚だ滑稽である。

或るお目出度い劇評家が此れを見て、歌舞伎の玉手は納戸への入りが早過ると評してゐたのを讀んだが、此れは全く芋をころがした落語の本膳よろしくである。

大切の桂川の道行は強腕綱造の三弦だけのもの、お半と長右衛門が八の字の繪面に極る件で、兩人ともに下手向きなど文樂人形の悪弊の一つである。

後記

此の度の文樂では古靱太夫が非常に好調で、此の人一流の考い過ぎがなく、道明寺が平凡以外に四ツの出し物皆佳作で前回の低調を取返して今度が眞の櫓下披露興行であつた。人形は座頭の榮三だけが與次郎の如き進歩した演り方があり、其他では伊達太夫と呂太夫に進境が見へて心強かつた。

此れは相三味線の喜左衛門と仙糸に負ふ所が多いと思ふ。

大隅、住の兩太夫は年少の相三味線で安住してゐる如く見へて甚だ寒心にたえない。

人形は若手に進境がなく、政龜、小兵吉の兩人は組見がない爲か役々附かず、漸く老境が著しく寂しくかつた。

よつて明瞭となり、又陣屋までの筋道は脇ヶ濱の添附によつて説明がついてよく分る。これなら淨瑠璃を初めてきく人も物語りの面白さを先づ／＼理解させられる譯だ。太夫、三味線、人形の出来不出来は暫らく措いて問はず、近頃頗る激増したズブ素人の見物に豫備智識を興へ、先づストーリーへの興味を持たせる爲にはかうした企劃が是非必要でなければならぬ。その意味で晝間興行をかうした通し狂言本位に企劃して、一方内部の刺員融通の爲にも、又技藝奨励の一助にも役立て、太夫、人形、三味線の交代制でドン／＼目先きを更へて行く事は文樂將來の爲の捨石として、強ち無意味な業でもない。もとより大して採算にはなるまい。否或は赤字が出るやうな結果になつてゐるかも知れぬが、結構それも明日の收穫への種蒔きと思つて、多少の犠牲は忍ぶべきであらう。

さて今度の晝の部で印象に残つた諸役を摺記すると太夫で

綱 昇 淨 瑠 璃 會 評

小津賀紋の器用な「山名屋」が満場を娛しませた。後へ清冽で遠い重之助勝入の「縁三」が出た。

重之助の「三浦別れの段」は「お寝顔なり」と……や「行きつ戻りつ」……の邊りを秘々聴き度いと心樂しみにしてゐたが、その詩韻深い前半を省いて藤三の出から語つたのはいさゝか失望した。而し演出は品があつて眞摯で良い。輕妙な滋味こそないが、藤三を意外に佳く語つた。

「井戸よりぬつと藤三郎」……は巨怪さは完出しなが小遊い姿があつて悪くない。

高綱になつて前の酒脱とカラリと變る豪銳さが今一息だが、三浦之助は清潔優美で人柄にある十次郎と演出的に混同しないのも腕である。

の義經、絃、綱助、三生、猿幸で、力の籠つた「勸進帳」の掛があつた。

吉 右 衛 門 と 小 兵 吉

菅原の序切、「傳授場」を見ると、秘々吉右衛門は良き院本役者だと思ふ。此の人の藝の持つ濃い情韻は適切な院本の名作を得ると光芒を放つ。

劇全體としては文樂の住太夫の傳授場の方が簡素な密度と壯重な香りに富んで佳き統一性を展開させるが、此の一段のテーマである。主従師弟の恩愛感を切々と表現する技力の外に、吉の源藏は戸浪との夫婦の情を大切な主題の裸に緊密にモリ上げた。

それが如何にも情理を辨へつゝも愛情に引きづられて大恩のお主の忌連に觸れた源藏の過去と人物を熟描して面白い。

妻は夫を、夫は妻を、……と互に想ひいたわ 乍ら三世のお主に一切を捧げつくす至眞の境地が渾然迫る。眞情切々の天婦愛を通して、深淵な主従感を浸透させる劇韻を高く評價したい。

菊五郎の菅相丞は淡々と演 乍ら、吉の傑技をしゆつくり品で受し止めるのが、賢

時姫は情熱的な濃麗さに少しく缺けるが氣韻のある風趣が整つてゐる。「お情に似て情けない」……の餘韻のある滋趣「それこそ誠の親の慈悲」……の含蓄のある切愁が印象深い。眼目の「北條時政、討つて見せう」……は小味に潤ひのある巧さで演るが、輪廓の深い切迫性が心情的にモリ上らぬ恨がある。それと、「父様赦して下さい」……に崩れるやうな憐美さが涙々と溢れて欲しい。

「どちらが重い輕いとも」……は密度深く心韻の籠る表現法が好ましい。

若好三生の「勸平腹切」は巧者で小綺麗に纏つてゐる美聲の「忠六」だが陰影と迫力に乏しいのが庇だ。沸々と心を揺ぶる心理苦惱が腹の薄い爲め描き出せない、この人の語り物は陰影の濃い内攻的な悲劇より絢爛美麗な情緒物に適してゐるやうだ。

三生の絃は若好とは正反對に強靱性があ

明であり、流石でもある。

住太夫の「傳授場」も源藏が良い。

前半、尾羽打枯らした素浪人の佻しさと陰影を醸出させるのが老巧で愉しめる。

住の熟した味が簡素な裸に深い情脈を湛える。

人形では小兵吉の戸浪が文樂の良隨を發揮する。その枯淡な艶と洗ひ上げた潤ひは一寸と筆舌に盡せない至妙な「さび」がある。

玉助の源藏に充分芝居させ乍ら、心を一身同體にして、情愁を流露させる腕が非凡

發 表 會 の 今 日 に 至 る 迄

豊 澤 芳 太 郎

つて太い線が貫き流れてゐる、筆者一度、素昇、三生のコンビで「忠六」が聴いて見たい。

越駒、津賀昇の「袖袂祭文」……は練り上げた巧さを豊富に持ち乍ら、聲に任かせて足取が長過ぎて緩急の妙に乏しい。實力のある人だが悠放に語り流す稍自己陶醉が情しい。津賀昇の絃は懸命だが、越駒の足取り、長さについて行けず、絃感を鈍らせる箇處があつた。

素昇、猿玉の「酒屋」……は悠揚迫らず堅實な巧さと藝の幅を所有する練熟な藝で無技巧の旨さが女義の域を離れてゐる。只近時情熱の浸透性を少しく欠ひつゝあるのが玉に庇だ。

時代、世話、両面を語つてもムラの少ないイヤミの無い東京女義中の屈指の腕達者だが、モウ一頑張り突き抜ければ、東京の東廣になれる良き太夫だ。

會主昇登改綱昇の「寺子屋」……は藝名の晴舞臺を、盲腸炎の爲め是非なく缺演した。辛うじて口上のみ参列したのは、痛ましくも悲壯だつた。

大切に梁登の富樫、土佐廣の辨慶、猿春

だ、殊に、こまやかな夫婦の情愛を通して主従名残りの悲愁を色濃く迫らせる手法が偶然吉の演出と合致する。「傳授場」の源藏夫婦の演出は斯くあり度い。

歌舞伎や文樂の面白さは、主要人物中一人の演技の傑出が良き劇響と擴大深化させて、その人物を中心に劇韻を高潮させる。

勿論、古典劇演技上の綜合性は重要な演出主體だが、技力の高低深淺に依つて「源藏の傳授場」とも戸浪の「傳授場」ともなり得る處に、古典演劇の不思議な魅力が妙在する。

古曲發表會も其の名稱どなり世に埋れた古曲を發表する研究團體として産聲を擧げて、早や四年目を迎へる事となりました。

會員の朝見太夫、巴太夫、駒登太夫、卯太夫、猿喜知、松市郎、美之助、絃内、扇

之助、和孝の諸氏と共に、十五年二月、丸の内電氣俱樂部に初公演會を催しました。何しろ久しく絶へて居る古曲を發表すると言ふ、興行的には實に不利な立場にありま

を重ね、心静かに當日を待ちました。其の時の外題は、父松太郎の指導を受けた「羽衣駿河舞の曲」と、「傾城倭草紙、蝶の道行」でした。

扱、華々しく名乗りを挙げた初公演は會員懸命の宣傳にも拘らず数へる程の聴衆しかなく、失望の中に幕を閉じました。然し石の上にも三年と、今後一層の努力を誓ひ一致團結して研究心に鞭打つ申合せを致しました。然し公演會が此不入とて、自然と財政にも惠れず、或る時は各自が一役づゝ、彈く素義會を催し、其の祝義全部を會計に繰入れ、亦或る時は踊りの地方に頼れた謝禮金を貯へたり、實に惡戰苦闘を續けて参りました。

此の努力が漸く實を結び、私達の發表會が趣味や自己満足の爲によつて居るのでなく、眞實に淨曲界の爲めに努力してゐるといふ事に同情され、巴州、愛水、巴偶、里芳の皆様の外、他の素義有志の方々を始め先輩諸師の御後援と御鞭撻を受ける様になり、同時に練人形の結城孫三郎師も一座を率いて賛助出演されると言ふ次第にて、漸次聴衆も増し、昨秋の公演會の如きは定期

迄に最早、満員の盛況を見る事になりました。

次に當會が新發表した曲目を挙げて見ますと、

羽衣天人駿河舞の曲。傾城倭草紙、蝶の道行。天の岩戸神樂。伊勢音頭踊り。日親記。藤浪物狂ひ。忠臣一刀祇園の曙。春の富士。嵐山姥足柄山。五月の調べ。敵討愛媛華龜山夢の驛路。

等でした。尙、来る四月二日。並木俱樂部にて上演する、彌陀本願 信記は、父松太郎が最も崇拜して居た名人豊澤團平師の作曲にて、明治十九年五月大阪彦六座で初興行を致し、非常な大當りをした新淨瑠璃であります。

此頃が一番團平師が作曲に力を入れた時代で、加古千賀夫人の作詞と伴つて、大當りもさこそと思はれる淨瑠璃で有ります。父は此の名人團平師が作曲された数々の淨瑠璃が遷る時代と共に次第に絶へつゝ、あるを當日頃歎いて居りました。長年父の膝下にあつた私は、父の遺志を受けついで、同人諸氏と共に是等名曲の發表につとめて参りました。

兎に角、長い間の苦勞は報はれて、漸く一人歩きとまでなりました此發表會を、今後共どう美事に育つ様に、御鞭撻を賜り度、重れて同好の皆様や先輩諸師方々にお願ひ致す次第でございます。

内田三千三氏より

前略友人千葉新七氏か い文樂の番附を見せて貰ひました處、中に「櫻時雨」の初上演の番附があり、それに依ると櫻時雨の作曲は豊澤仙左衛門となつてゐます。おそらく三代目團平かとおもはれますので、前號に新左衛門としました事を仙左衛門に訂正致します。

太棹社報

- ◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。
- ◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。
- ◎持種の催はしの外、前書を略します。
- ◎番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります、御諒承を乞ふ。(掲載順不同)
- ◎なほ見出しに二號活字を使用、持別掲載方御希望の會は其旨御一報を乞ふ。

太棹社

文樂人形展覽會

大日本淨曲協會新理事長として齋藤金太郎氏就任以來、協會の使命たる種々なる事業に着手、就任に當り氏は協會發行の新報に抱負を發表し、淨曲精神の普及に盡瘁、廿數萬の私財を投じて人形部、義舞等を設立し義太夫に依る日本精神の作興を目的とし、上野松坂屋ホールに於て一月廿日より五日間、日本精神作興の會を備はした事は既報の通りであるが二月十六日より廿日迄その第二回を同ホールに於て開催し、同廿一日までは六階にて文樂人形展覽會を催はし人形頭、衣装の展覽に加へて齋藤金太郎氏を始め、豊竹古靱太夫、豊澤廣助、豊澤猿藏其他の諸氏より文献として先人の書簡、或は古

番附等の出品があつて頗る意義あらしめた。

なほ實演會には三宅周太郎、宮尾しげを、松崎實氏等の講演もあつたが、五日間の番組左の通り。

一初日―鳴門(若好、清一) 廿四孝(山生、猿藏、琴、松四郎) 二日目―壺坂(綾之助、清一、ツレ、清二) 鮎屋(靜、佳世子、忠信、綾作、清一、ツレ、清三) 一三日目―本下(土佐廣、綱助、琴、佳世子) 戻り橋(山生、猿藏、ツレ、猿三郎) 四日目―新口(素昇、猿玉) 先代(山生、猿平) 一五日目―忠三(殿中、佳仙、裏門、佳清、綾、綾作) 忠七(由良之助、山生、お輕、操、平右衛門、千晴、重太郎、乃菊、喜太八、力彌、義昇、彌五郎、若島、絃、道之助) 以上人形部出演。

梅鉢會春季大會

黒川叶氏を會長として梅鉢の紋所の人々を以て組織された梅鉢會の春季大會は天神忌に當る二月廿五日午前十一時より並木俱樂部に開催。

忠六(勘平、以呂波、母、叶、郷右衛門、喜香、彌五郎、桔梗、扇之助) 春掛(叶、龜造) 岸姫(喜らく、勝助) 中將姫(扇華、扇之助) 寺子屋(吉樂、鶴助) 安達(里芳、勝助) 堀川都雀、巴丈) 儀作(以呂波、扇之助) 先代(登盛、新造) 蝶八(彌

聲、扇之助)佐太村(喜香、猿喜知)太十(雅樂、勝助)崎(清子、都太夫)市若(子太郎、綱助)酒屋(蝶花、勝助)忠九(義昇、龜造)十種香(都竹、都太夫)酒屋(うつろ、龜造)合邦(桔梗、龜造)忠七(由良之助、桔梗)。お軽、義昇。平右衛門、叶。重太郎、蝶花。喜太八、彌聲。彌五郎、力彌、子太郎。猿藏)

忠靈塔献金淨曲會

小石川富坂に於ける忠靈塔建立工事は着々進行中であるが今回中川愛水、森内六花兩氏の肝入りで帝都女義太夫有志を以て職域奉公として同塔へ献金を企て三月六、七の兩日上野松坂屋ホールに於てこれが献金淨曲會を催した。出演順は二月十八日夜愛水氏宅にて抽籤を以て決定。

一初日(先代)光玉、小和光(寺子屋)吉樂、綱助(宿屋)つる子、勝八(玉三)愛水、綾之助(逆櫓)雅樂、綱助(岸姫)淺路、綾之助(揚屋)綾登、綾秀(酒屋)和子、重之助(先代)井筒、勝八(壺坂)文昇、小津賀(鮎屋)義昌、綱助(太十)松濤、紋教(寺子屋)登盛、住若(明烏)光玉、綾之助(辨慶)勝駒、越駒(白石)素京、素昇(陣屋)乃菊、綾之助(一日目)太十(魚友、清三)白石(日ノ丸、土佐廣)新口(一樂、清一)太十(榮玉、若好)宿屋(六花、清一)沼津(都山、清三)佐太村(ほくろ、綱昇)堀川(末廣、土佐廣)鮎屋(清華、猿玉)合邦(桔梗、

土佐廣。義經、猿春。伊勢、常陸坊、素次。駿河、津賀重。絃、綱助、猿幸、三生、駒登久、津賀昇、紋彌)

鶴澤彌玉喜壽祝賀會

鶴澤彌玉師の喜壽を壽ぼぐ祝賀淨瑠璃會が大日本淨曲協會の後援で三月四日正午より日本橋俱樂部に開催された。素義有志の素語りの中に協會の人形入りで野崎村と千本櫻道行の掛合があり、盛況を呈した。本社には案内状も何もなく、番組み其他詳細は遺憾乍ら記載し得ず。

社告

本號は卅二頁に編輯を致しましたが、印刷が間に合はずだん／＼遅れるばかりで止むを得ず減頁の上不取敢發行仕りました。畑中氏の「文樂を聴く」中山氏の「床から人形に魂を送れ」伊藤氏の「時局と藝能」岡田氏の「東橋亭懷古」宮尾氏の「文樂圖譜」其他只今印刷にまはしてありますので續いて間もなく次號が出来る事と存じます。三月に入つての催し、其他會報も次號に掲載する事に致しました。斯くして發行日を正確に取り戻したいと思ひますので何卒御諒察の程を偏に御願ひ申上げます。

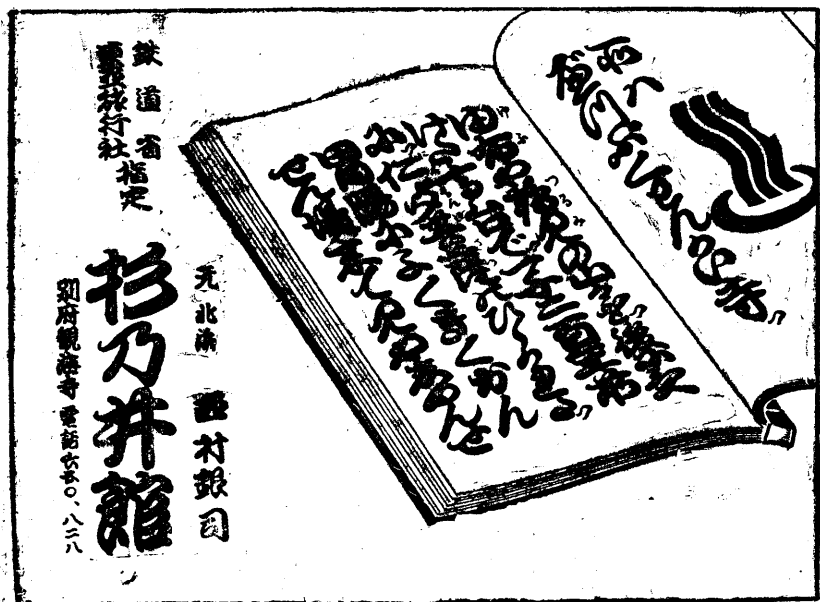
清一(玉三)花菱、土佐廣(壺坂)星野桔梗、綱助(堀川)東枝、清三(岸姫)二光、清一(先代)一廣、土佐廣(山名屋)里松、清一(阿漕)北壽、若好(長局)山生、清一)

豊竹昇登綱昇と改名

披露義太夫大會

豊竹昇登は今回鶴澤綱造の門下となり竹本綱昇と改名、その披露義太夫會を前號既報の通り二月廿二日午後一時より日本橋俱樂部に於て華々しく開催した。然るに綱昇師は盲腸の爲め披露會發表後間もなく入院、亦綱昇の爲め挨拶に東上出席の筈なりし鶴澤綱造師も病氣にて出席叶はず、當日は星野桔梗氏が代つて挨拶を述べ、綱昇は病後辛ふじて高座に並びて披露に及んだ。師は四國阿波に生れ幼にして郷里豊竹千代登に師事し、長じて大阪に出で豊竹昇之助の門に入り専心鍊磨を續け、東上後は鶉鷄會々員として益々精進し昨夏正式に綱造門下となつたものである。當日の番組左の通り。

壽式三番與(翁、綾之助。三番與、住若、千歳、彌周。ツレ、佳仙、佳世子。清一、ツレ、清二、清三、清壽)山名屋(小津賀、紋教)三代記(重之助、勝八)忠六(若好、巴住)安達(越駒、津賀昇)……口上(鶴澤綱造代理星野桔梗)酒屋(素昇、猿玉)寺子屋(缺演)綱昇、綱助(大切安宅關)富樫、染。辨慶、



森 三好

昨年十五回を重ねたる三好會は第十六回を相互俱樂部に於て近く開催の豫定にて語り物は左の通り。なほ本會員津満子吹込みの「柳」は各地にて好評を博し、今回戦地へ慰問として町會を経て寄贈する事になつた。

二度目(岡玉) 朝顔(喜三香) 寺子屋(津満子 本下(聲鶴)忠六(梅聲)十種香(掛合)絃(三好、津満子))

二月二十二日國府津督聲會連は平塚市見樓階上に於て湘南共樂會同市佐藤生駒氏の後援を得て義太夫會を開催せし處、小田原藤澤方面より多數來聴者あり近時になき盛會を呈し、大入滿員にて満場の拍手喝采裡に十時閉會せり番組左の通り。

柳(金菊)忠六(督菊)十種香(義好)壺坂(督廣) 酒屋(末廣) 儀作(吾妻)鳴門(盛鶴)絃(督八、督廣)

三 好 會

に大開格を以て開催の九州名人會に氏は東都五十義會の大關として特別出演する事になつたが、氏の友人長崎の廣瀬清笑氏も出演する筈である。

義太夫翼會 翼會の四月は廿四日

正午より並木俱樂部にて開催。寺子屋(白猿 未定(三由) 本下(大嘉津) 堀川(山門)絃(猿藏、猿三郎、松四郎)

二宮の慰安義太夫 神奈川縣二宮町香妻座にて三月廿七、八の兩日正午より同地銃後慰安義太夫會を開催二日間の語り物は宿屋、松王(白猿)十種香、太十(菊泉)合邦、儀作(和豊)本下、辨慶(大嘉津)絃(猿平、猿藏)

女義若女會 第六十二回を、二月十五日午後五時半雷門東橋亭に開催。

鈴ヶ森(佳世子、綾作) 玉三(素次、清三)新口越駒、津賀昇(辨慶)綾千代、猿玉(吉田屋綾之助、清一)合邦(素八、巴佳)……六十三回(三月一日)聚樂町(佳世子、綾作)玉三(佳仙、清二)新口(素次、清三)朝顔(佳若、清一)山

正午より、松坂屋ホールで開催。新口

淨曲長生會 第八回を三月十八日

二月生誕 會員は和紅、梅聲、源縁、かなめ、高尾、花昇、東松、男蝶、若路、さと、和昇、單語、素鹽、貴昇東、園樂、可笑(以上順不同)の諸氏で、なほ同會は婦人部も組織し正枝、燕糸、梅の、文字子、よし子、文字、紅蔦、愛次、蝶子、たつ子の諸氏が會員である。

因會男子部 義太夫因會男子部は

五月七日並木俱樂部にて春季大會を開催、三月七日並木俱樂部にて協議會を開いた。

野澤桑二郎師 秋田縣田中町にて稽古所を開いてゐた野澤桑二郎師は神馬里芳、吉田登盛氏の後援にて出京、因會にも入會。

當座帖

野澤吉季 五代目野澤市治郎を襲名し文樂座二月興行にて披露
吉田光之助 文樂座人形遣ひ吉田光之助は光造と改め、三月の文樂座にて忠臣藏道行の小浪を遣ふ。

(六花、清一)野崎(愛水、綾之助)先代(喜鳳、道之助)聚樂町(山生、鹿重)酒屋(一樂、良造)朝顔(正鳳、道之助)柳(佳津子、綾之助)布四(乃菊、綾之助)
川口子太郎氏祝賀會 三月二十日午後四時より山王小泉亭にて川口子太郎氏就職の祝賀會、四十名の發起にて開催、川口氏の大物浦(和孝)封印切(綱助)の二段を聴き、後座談(オクリ)の種々相、星郎桔梗)講演、言語藝術として淨曲、法政大學教授大西雅雄)ありて盛會。因に川口氏は今回東京市指導員として絹織工業組合に就職されし由。

鳥うつな氏 鳥うつな氏夫妻は長崎市八幡座にて三月廿七日より五日間開催の竹本光大の追善義太夫に出演の爲め十九日九州へ。此追善會に二日間出演して同州、卅一日は別府竹河原温泉樓上に於ける竹本組昇連の歡迎淨瑠璃會に出演。次いで四月二日より三日間長崎公會堂に於て養生會の元老並び

竹本織太夫 大阪市住吉區天下茶屋三丁目十三番地へ轉居。電話天下茶屋四三八〇番。

訃報

竹本春太夫師 一昨年竹本叶太夫より七代目春太夫を襲名し文樂座に出勤してゐた本名橋米吉事春太夫師は一月十一日逝去。享年七十一。

竹本綾秀師 二月來病床にあつた竹本綾秀師は三月十三日午前八時半急逝。享年五十。哀悼の意を表す。

太樟社

鈴木和樂氏追善會

四月廿六日並木俱樂部にて施主鈴木家主催兜會後援のもとに開催。

麻荒澤和增增武乾橋平歸野星淺錦金細藤橋平齋木寺奧坂影藤中柳
 田木部田田田笠本井山島野田田川田本井藤村岡村本山牧川
 喜キ其金喜喜吉桔掬軌世貴桔奇錦金三三山か三三ろ淺淡愛有
 くエ角扇香城樂梗月外花昇梗聲松鳳清壽司榮生え幸玉を路路明
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

倉田山花菊三龜伊小鈴須村吉北野橫吉高岩西保吉三山吉岩西吉佐
 田口田房地口田藤原木田上田村口井田田村坂坂並田良木村川久間
 司司壽紫秋松松松松松美津三三三美地末游有玉義義蟻義喜喜喜
 樂重瓢蠟月藤花鶴樂寶義豆芳葵と由句操成史曲鳳昌昇若雀光照勇
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

大阿同米仁德三江時沼富的井佐近白松魚池桑福平高高永西中打濱
 阪同同國木永浦原田井岡野上藤江井岡崎田原安山品瀨野內島矢口
 氏西兼杉(地)翠靜扇清靜盛生關聲清清清里美美美瓢平一神昭新晋秋
 鶴西廣陶方松翠華昇史鶴昇路鳳司華華雄福尚峰登茶重靜風平華水華
 峰紫玉岳之(部)氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

北安同同同濱同同同清同同同靜八長同川平同同同橫下同船大神
 京東松水同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 關岩片佐宮飯榊西栗久渡山森加古行傍國田小田鈴保安川吉岡
 崎橋藤川田原貝錦正梅壽大美以紀鳴集榮吞香鈴悟部十
 長山國和(は)自安員錦聲正梅壽大美以紀鳴集榮吞香鈴悟部十
 門彦榮聲め樂樂湊昇保勇笑魁松彌穗波鳳門樂玉笑雀鳳堂司公源
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

吉安中佐宮北佐西和中橋阿森櫻吉關關荒高鈴木水廣
 田藤藤藤內島藤野田村本部內井川口口木瀬木村部
 登と澤平ほ北巴巴春白梅六呂浪與一一一いろ
 盛ろ巴助ろ斗偶洲和猿月一花光補子樂泉昇信司
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

岡本吉金林神河松岸久栗緒堀外高國福葛大平安岡田小
 本木田子馬守本米原方山橋友水和熊野藤藤崎中川
 大龍里林里痴千竹中千千と富東東都都都都都都都
 岡熊昇松昇芳樂鳥史次鶴晴わ彌好光樂玉仙平昇竹洲十山
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

中水乃小島萩太川井坂杉野根小井田小大須八岩米黑高加飛青林
 野野村鹽う原田口上倉山田本林上口森用賀木崎澤川橋藤石山
 吳乃つっ無太素素高團二辰叶嘉津勝ん雅可な和
 羽昇菊潮ほぼ涯郎鳳遊橋尾壽八巽壽昇津子駒昇樂叶遊兜め曉勢
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

及大淺堂寶桑岡上中山中保田湯田松河原安鈴安上長福篠岡山本石
 川築井野藏原崎田田崎島谷中淺中岡野田藤木部杉谷中倉田下城川
 蝶鐵天永圓語五向古紅廣光湖語國越光兒士文文又山彌彌冠華
 旭葵花幹昇樂六好口陽平司笑玉月吟聲巴樂雀登盛久糸門聲生之笑
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

後本
 援誌
 名譽
 會
 員
 (イロハ順)

謝 告

前號で誌代改正の社告を致し皆様御快諾をお願い申上げ、名譽會員の諸氏には別に手紙を以て之又御願ひ致しました處、御承諾を賜りました上に今後の御鞭撻に預りました事は感謝の至りに堪えませぬ。誌上を以て難有厚く御禮申上げます。

就きましては早々と誌代の差額を御拂込みに接しました方々もありませんが右差額は前金切の際に加算をして集金致したいと存じます。何卒御諒承をお願い致します。 太棹社

編輯後記

☆暑つさ寒むさも彼岸まで、一日増しに好季節に向つて参ります。今年には各會の大會が早々と二月頃から始まりましたが、此分で行きますと今年も相當斯界は賑ふ事と存じられます。

☆本號も又々延刊となりまして何んとも恐縮に堪えませぬ。追々發行日を正

確に取り返したいと思つてゐますが、何程思つても今の時勢を認識すれば印刷所の手不足も無理が言へず、一層頁も薄つべらに表紙もなしに印刷や製本の手数を省いて見ようかと思つたこともありましたが、折角今まで雑誌として押し通したものを今更それも残念でありますので、精々印刷所の手順をよくして極力皆様の御期待に添えたいと存じます。何卒今の處今暫く御諒察をお願い申上ます。

☆借て誌代改正の事ではありますが、今回の改正に就ては實は二割位は購讀お断りに接する覺悟で履行したので御座いますが、僅か六七名の方々からお断りに接したわけで、此方々は以前から義太夫界を遠ぶさかつてお出でになりそれでも今まで難有くも御愛讀を賜つてゐたもので、これは御尤もな事にて其他極めて少數(二三人に過ぎず)の人々が苦情を言つたといふ事を耳にしてはしたが、これ等の苦情は一笑に附して氣強うなれと却つて認識満々たる御同情のお言葉を下さる方々が多く誠に難有い事で御座います。何卒今後とも従前に倍し御後援と御鞭撻を賜り度くお願い申上げます。 —富取生—

人形淨瑠璃史研究

—三百年史研究—

若月保治著

挿畫三百六十葉
A5判千三百餘頁
價十八圓 送七二

從來兎角看過され勝ちだつた近松以前の原始人形淨瑠璃より現代に至る間、所謂人形淨瑠璃三百年史を、實演方面研究と人形淨瑠璃の學問的研究の兩者を相互に媒介させ兩者の統一を計りつゝ十年間の身血を注いで成れる人形淨瑠璃界の畫期的一大名著である。

人形浄瑠璃史研究

吉田文五郎著

寫真十數葉
A5判上製函入
價四圓三十錢

日本獨特の藝道と美の傳統を誇る人形芝居の不出世の一大巨匠吉田文五郎翁の六十年間に亘る藝術と生活へのひたすらなる努力と情熱の精進、血と涙の惡戰苦闘の結果は、遂に妙技入神の境地に至らしめた。この努めてやまざる大才が語る感嘆置く能はぬ藝談集。

定	一部金五十錢	郵税一錢
六月分金	三圓	郵税共
一年分金	五圓	郵税共

▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なるべく振替に御送金の事
▼郵券代用一割増

昭和六年三月三日印刷納本
昭和七年二月十五日發行

第百四十二號

(發行日五廿月毎)

東京市小石川區音羽町一ノ二
編輯兼 富取壽鹿
發行人

東京市小石川區指ヶ谷町四
印刷人 杵淵五郎

東京市小石川區指ヶ谷町四
印刷所 柏葉社
東京一三八三

東京市小石川區音羽町一ノ二
發行所 太棹社
振替東京三一七八五番

櫻井書店

東京大塚町三三
小石川三三
川石三三

振替東京九〇九六
東京九〇九六

若實美味
愈益増進

料理の味をよくする

チキンソンス



東京チキンソンス株式会社

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十八年二月廿三日 印刷
昭和十八年二月廿五日 發行

（毎月一回
廿二日發行）

大棹（第四百四十二號）

（定價五拾錢）